

特別支援教育の知見をいかした学校経営Ⅴ
—教育のユニバーサルデザイン化に向けて（尼崎市との連携から）②—

A School Management based on the Findings of Special Needs EducationⅤ :
Towards the Universal Design of Education (from Cooperation with Amagasaki)②

百瀬 和夫*
Kazuo MOMOSE

抄 録

昨年度より、「発達特性に応じた保育・授業のユニバーサルデザイン化の構築～すべてのステージで役立つ子ども理解と保育・授業力向上プラン～」というテーマで、尼崎市教育委員会との連携事業に取り組んできた。尼崎市の先生方のニーズに対応し、本学の教師が講師となり、夏季集中講座や巡回指導などの取り組みを行った。また、本年度も尼崎市の幼稚園から高校までの異校種の教師が集い、「保育・授業のユニバーサルデザイン化研究部会」を組織し研究をすすめることができた。異校種であるための「発達段階の違い」や「教科の壁」等々の課題を乗り越えて、協同で研究を進めるという貴重な場を得ることができた。

さて、近年の特別支援教育への認識の広がりから、幼稚園・小学校・中学校・高等学校等、それぞれのステージにおいて、特別な教育的支援を必要としている幼児・児童・生徒がいることは、明らかである。これらの特別な教育的支援を必要としている子どもたちを含めたすべての幼児・児童・生徒が安全で安心して過ごせる学級づくりや、楽しくわかり易い授業を目指していくことは、それぞれの学校現場での大きな課題である。

今回、取り組みを進めてきたこの2年間で得られた「成果」や今後の「課題」について考察した。

I はじめに

最初にこの2年間、教育のユニバーサルデザイン化に向けて、尼崎市の学校現場のニーズに目を向け、本学との橋渡し役として、夏期講習や巡回指導の開講に尽力をいただいた尼崎市教育総合センター所長をはじめ、職員の方々にお礼を申し上げたい。

さらに、本取り組みの意図をいかし、ユニバーサルデザイン化（以下、UD化）研究部会に積極的に所属し、ここで学んだことを日々の実践にいかそうと研修に励んでこられた、尼崎市の幼稚園から高等学校までの各校種の先生方にも改めて心より敬意を表したいと思う。

特に、本年度は2年目ということもあり、尼崎市の幼稚園から高等学校までの各校種の先生方がこのUD化研究会の場で、「困っている子どもたちをみていく視点を話し合い、実際に子どもたちを観察・記録し、その実態から指導・支援の手立てを工夫しその成果を検証していく」という一連の取組として実践されたことを大いに評価したい。その成果として、教育においてUD化の構築を目指すことは、校種や教科の垣根を越え、「目の前の子どもたちの実態を踏まえた『みんなが楽しく分かり易い』研究を行い

* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

得る」という可能性を示せたように思う。

さて、2年目である今年度の、夏期講習や巡回指導などの取り組みと、UD化研究会での取り組みについてそれぞれその成果と今後の課題をとりあげてまとめとしたい。

II 研究内容

1. 研究テーマ

『発達特性に応じた保育・授業のユニバーサルデザイン化の構築』

～すべてのステージで役立つ子ども理解と保育・授業力向上プラン～

2. 研究テーマの設定理由

本学と尼崎市教育委員会は、包括協定に基づき、教育分野で協力し合う関係が構築されている。平成23年度には、独立行政法人教員研修センターの選定による教員研修モデルカリキュラム開発プログラム委嘱事業として、「特別支援教育の考えを取り入れた現場往還型研修による授業力向上プログラム」の開発を協同で進めた。その際、教員に対する研修冊子「みんなの特別支援教育～授業のユニバーサルデザイン化をめざして～」を作成の上、尼崎市の全教員に配布し、「みんなの特別支援教育」と「授業のユニバーサルデザイン」に対する理解とその成果の普及を図ってきた。また、毎年、尼崎市に採用された初任者教員に対しても、この冊子を配布し、研修が実施されている。

このような本学との連携事業の経過を踏まえ、継続的かつ日々の教育活動に直結する実践的な研究の必要性を鑑み、昨年度より「授業のユニバーサルデザイン化」に向けて、尼崎市教員のニーズ調査に基づき、尼崎市立教育総合センターとの連携により「夏期講習」や「巡回指導」を実施してきた。さらに、「授業のユニバーサルデザイン化研究会」を組織し、本学教員の高い専門性を提供しつつ、大学の調査研究を土台とした実践研究の場として本研究部会が位置付けられている。

「夏期講習」や「巡回指導」では、本学教員が高い専門性を発揮することで、受講した尼崎市の教師の指導・支援の力量の向上を図ることをねらいとした。一方、本学教員にとっては、直接的に現場の教師への指導・支援をすることを通して、現場の様々な実態を皮膚感覚で実感でき、我々大学教員にとっても、指導・支援の力量の向上につながることも一つのねらいとした。

次に、今年度「研究会」は、幼稚園（3名）、小学校（5名）、中学校（1名）、高等学校（1名）で教育に携わる教員で構成され、昨年度に引き続き幼稚園から高等学校、大学までの長期的な視点に立った教育研究の実践を想定することができた。

異校種の教師の集まりであることは、教育に携わる教員の意識の変革を図るとともに、それぞれの学校園、教室での教育活動において、より効果的な活用を促すことができるような「汎用性」の高い実践的な研究としていくことが求められる。実際に昨年度の部会の様子からは、普段接することのない子どもたちと触れ合ったり、平素は入ってこないような情報に接することになったり、それぞれが互いに良い刺激を受けたようだ。

昨年度に引き続き、『発達特性に応じた保育・授業のユニバーサルデザイン化の構築』を研究テーマに設定し、「すべてのステージで役立つ子ども理解と保育・授業力向上プラン」をサブテーマとすることとした。

昨年度は、教師が子どもをどう理解するかによって、教育行為（指導や支援）が決定されていくとすれば、「ユニバーサルデザイン化」を図るうえで、「教師の子ども理解力の向上」は必須であると考え、子どもたちの理解を深めることを中心とした。そして、この部会で得た知識をもとに、部員の先生方そ

れぞれが各学級での子どもたちの姿に様々な「気づき」を得て、指導・支援の力量アップに向けて歩みだすことができた。

今年度はそこからさらに具体的な実践を試み、子どもたちの変容をとらえるところまで取り組みをすすめることにした。

3. 2015 年度研究の取り組み

3.1 「夏期講習」「巡回指導」での取り組み

下の表は平成 27 年度の連携による連携事業一覧である。研修講座、巡回指導、講演を合わせて延べ 11 回の取り組みを行うことができた。

表 1) 平成 27 年度尼崎市立教育総合センターと関西国際大学との連携による教員研修一覧

	研修内容	場所	日程	本学の講師	対象
大学での研修講座	幼児教育研修講座①	関西国際大学	8/28 (金)	松岡宏明	尼崎市全教員
	「関西国際大学で遊ぼう～遊びで育てる力～」				
	幼児教育研修講座②	関西国際大学	8/24 (月)	島川香織	尼崎市全教員
	「関西国際大学で遊ぼう～音感を楽しみ感性を育てる～」				
巡回指導	幼稚園への巡回指導①	立花幼稚園	7/10 (金)	奥山登美子	立花幼稚園職員
	幼稚園への巡回指導②	小園幼稚園	7/17 (金)	奥山登美子	小園幼稚園職員
	幼稚園への巡回指導③	大島幼稚園	7/13 (月)	百瀬和夫	大島幼稚園職員
	幼稚園への巡回指導④	長洲幼稚園	2/3 (水)	百瀬和夫	長洲幼稚園職員
	幼稚園への巡回指導⑤	長洲幼稚園	2/5 (金)	百瀬和夫	長洲幼稚園職員
講演	教務担当者研修	教育総合センター	8/28 (金)	百瀬和夫	尼崎市全教員
	「特別支援教育の知見を活かした学校経営・学級経営」				
	初任者研修①	尼崎養護学校	9/15 (火)	百瀬和夫	尼崎市 1 年目教員
	授業のユニバーサルデザイン化について				
	初任者研修②	尼崎養護学校	10/13 (火)	中尾繁樹	尼崎市 1 年目教員
	授業のユニバーサルデザイン化について				
	初任者研修③	尼崎養護学校	10/27 (火)	中尾繁樹	尼崎市 1 年目教員
授業のユニバーサルデザイン化について					

*授業のユニバーサルデザイン化研究会は別掲

3.2 「夏期講習」「巡回指導」での取り組みの評価

では、実際にそれらの講座や研修を受講した尼崎市教員のアンケート結果の一部がをまとめたものが以下の表である。

表2) 2015年度 尼崎市との連携による講座 アンケート結果

日付	研修項目	受講者数	研修内容の満足度	研修内容の理解度	研修のシリーズ化を望むか	学びを実践化しようと思うか
8/24	音楽を楽しむ	31	3.9	4	3.8	4.3
8/28	遊びで育てる力	29	4.8	4.9	4.7	4.9
8/28	教務担当研修	56	4.5	4.5	4.3	4.5
9/14	1年目 UD化①	22	4.6	4.7	4.5	4.7
10/13	1年目 UD化②	24	4.6	4.5	4.3	4.7
10/27	1年目 UD化③	22	4.6	4.6	4.2	4.6
	合計/平均	184	4.5	4.5	4.3	4.6

※数値化の基準： そう思わない (1) あまりそう思わない (2)
 どちらも言えない (3) ややそう思う (4)

この評価アンケートの評価結果から考えると、「研修に対する満足度」の平均も、「研修内容の理解度」に関しても平均 4.5 ポイントとなっており、非常に満足度が高くニーズに沿ったわかり易い内容であったといえる。さらに、「実践化しようと思うか」については、平均 4.6 ポイントと最も高い数値であり、すぐに実践化できそうな具体的な講座や講演がなされていたことが理解できる。また、「シリーズ化」については、(それでも、平均 4.3 ポイントあるが) 一部悉皆研修が入っていたり、新任研修を兼ねてあったりで、設問との関連性に若干の無理もあったのではないだろうか。

いずれにしても、本学教員の高い専門性をいかした、実践的な研修が行われていたことが明らかになった。受講者のアンケートにも「目からウロコだった。」とか「そのように考えてもみなかった。」などの声が上がっていた。このように、尼崎市との連携による「研修講座」や「巡回指導」、「講演」等は、受講者である尼崎の教員の資質向上に少なからず寄与したと確信している。

さらに、こうした、学校現場の教員と大学教員との交流をすすめることは、多少の時間はかかるものの、大学の評価を押し上げ、引いては大学の経営の安定にもつながることになるのではないだろうか。

一方、講師をつとめた本学教員の感想はどうだろうか。以下にアンケートより抜粋してみた。

先生方はたいへん熱心で、かつ真摯な姿勢で受講され、自らの保育を振り返られたり、今後に生かしていく決意をされたりするので、たいへんやりがいもあり、その必要性を強く感じる。一方で、幼児理解や保育のあり方について、現場での課題の大きさを感じざるを得ない。多忙を極め、かつ研修の機会も限られていることから、じゅうぶんな力量を形成することが困難なのだと推測する。現場に対し、このような研修の機会をどんどん提供していかなければならないといつもながら思う。(「遊びで育てる力」
 図工：松岡)

受講した先生方から、「実践ワークショップがあり楽しくわかりやすい」「幼児が対象でどんな子でもやればできるということであり、気がした」「音楽があまり得意でないからこそ、子どもたちにさせてあげたい」等、配布資料の適切さおよび今回の研修内容を教育実践にいかしていくと答えたアンケート結果が大方であり、汎用化できる講義内容であった。また、「子どもと一緒に遊ぶ遊びをたくさんしてほしい」「質疑の時間をとってほしい」との指摘があり、先生方と幼児が同時の楽しめるものをワークショップとすること、および時間的に余裕がある講義内容とすることで、先生方との質疑の時間を確保していきたい。(音楽を楽しむ：島川)

※下線は百瀬による。以下同様。

松岡先生の回答からは、現場の先生方に直接講義・研修をしていくことの、手ごたえとやりがいを感じておられることがわかる。またさらに、現場の課題の大きさを感じとり、今後の研修機会の必要性を示唆しておられる。

島川先生の回答からは、音楽が得意でない現場の教師が受講しており、自分の力量を高めようとする意欲をやはり、手ごたえとして感じておられることがわかる。また、講義後のアンケートを自分にフィードバックし、より良い指導・支援につなげていこうとされていることも理解できる。

このように、尼崎市との連携による「研修講座」や「巡回指導」、「講演」等は、受講者である尼崎の教員の資質向上のみならず、業務において一定の負担があるものの、我々大学教員にもその資質の向上に寄与し、双方にメリットをもたらしているといえるだろう。

4. 授業のユニバーサルデザイン化研究会の取り組み

昨年度は、1年目の取り組みとして授業のユニバーサルデザイン化の必要性をはじめ、「子ども理解の視点」やその考え方について学ぶことを中心に研究を進め、研究部員それぞれに貴重な「気づき」を得られた。

そこで、今年度は「すべてのステージで役立つ子ども理解と保育・授業力向上プラン」をテーマに、子どもの実態をふまえた園児・児童・生徒への具体的な手立てを考え、実践し、評価する一連の取組を中心課題とした。そのために、一つの研究対象となる学級を選び、困っている子どもたちを部員全員で観察・記録・分析し、そこからさらに手立てを工夫し、再度子どもたちを観察・記録・分析し、自らの取組を評価する流れを設け研究を進めることとした。

4.1. ユニバーサルデザイン化研究部会の実施と概要

昨年度の「学び」と「気づき」をいかして、研究協力学級において児童・生徒の困っているところを中心にその様子を観察し、実態を把握することから始めた。それをもとに、困っている児童を焦点化し、その困っているところをサポートするための手立てを具体化するよう話し合った。

それらの手立てを授業において実践することを通して、児童の姿がどのように変容しているのか（或いは変容しないのか）を継続的に観察・比較することとした。これらの一連の取組により、児童の活動や学習への取組の変化について明らかにするとともに、困っている子どもたちに対するより効果的な指導方法について検討し、その成果について評価することを試みた。

表3) ユニバーサルデザイン化研究部会 研修一覧

月日	内 容	主な取り組み
6/ 3	研究計画(研究課題・テーマ・日程) 調査研究方法の検討 指導助言 関西国際大学 准教授 百瀬 和夫	研究の見直しにつ いての共通理解
6/19	授業実践及び事後研究 園田南小学校1年 音楽 单元名 「どれみのれんしゅうをしよう」 授業者 濱 聡美 教諭 の協力により実施 指導助言 関西国際大学 准教授 百瀬 和夫	児童の観察とポイ ントの把握
7/ 6	授業実践及び事後研究 大島幼稚園 单元名 「グループでポスターをつくらう」5歳児 授業者 下原 貴恵 教諭 指導助言 関西国際大学 准教授 百瀬 和夫	実践事例研究 その1
7/ 15	授業実践の記録(ビデオ撮影) 園田南小学校1年 国語 单元名「好きなこと、なあに」 授業者 濱 聡美 教諭 の協力により実施	実践事例研究 その2
8/27	資料の分析と支援計画の検討ー小学1年の取り組みー	
9/10	支援計画の検討 ー小学1年の取り組みー	
9/17	支援計画の検討 ー小学1年の取り組みー	
9/30	授業実践の記録(ビデオ撮影) 園田南小学校1年 国語 单元名「かたかなをみつけよう」 授業者 濱 聡美 教諭 の協力により実施	実践事例研究 その3
10/30	支援の成果と課題及び実践交流 ー事象に着目した取組・教材比較による取組ー	実践事例研究 その4その5
12/14	支援の成果と課題のまとめ ー事象に着目した取組ー	
12/17	支援の成果と課題のまとめ ー幼稚園の取り組みー ー小学1年の取り組みー	
12/24	支援の成果と課題のまとめ ー事象に着目した取組ー	
12/25	支援の成果と課題のまとめ ー幼稚園の取り組みー	実践事例研究 その6
1/18	研究のまとめ	
2/15	研究発表会	

4.2. 実践事例及び考察

4.2.(1) 0 幼稚園の実践事例から

0 幼稚園の実践は、クラス全体の園児にとって楽しく安心して過ごせるクラスづくりを目指すことを通して、特に支援が必要なA児に配慮しながらユニバーサルデザインの視点で工夫をした保育の実践事例である。

4.2.(1) a 園児の実態(A児の姿)

クラス活動では、目についたものに興味が移行し、立ち歩いたり思いついたことを話し始めたりするが、つくったりかいたりすることなど自分の興味があることに対しては取り組もうとする。6月時点においては、教師が「ここまでできたね」「あと～だけだね」と言葉掛けをすることで、見通しが分かり、安心して取り組むことができるようになってきている。友達とかかわりたい気持ちはあるが、自分の思いが通らなかつたりすると思いを態度で示したり、遊びを途中でやめたりしてしまう。教師がかかわることで、友達と一緒に活動する楽しさを感じつつある。

4.2. (1) b 実践の概要

(1) 単元名「グループでポスターを作ろう」5歳児

(2) ねらい ○思いを出し合いながら、グループのポスターを一緒につくることを楽しむ。

●(A児)友達がするのを真似たり、話すのを聞いたりしながら、友達と同じ場でつくることを楽しむ。

(3) 展開

幼児の活動	UDの視点	△環境○教師の援助	●A児への援助
4人グループに分かれる。	グループの作り方を工夫		●A児が安心して思いを言いやすい友だちと同じグループになれるように配慮する
	座り方、場所、位置の工夫	△同じグループの友達と顔を合わせて活動ができるよう、机に向かい合わせで座る。	●A児の視界に大勢の幼児が入らないように、意識が教師の方に向きやすいようにA児が座る場所を前方の正面にする。
	視覚的支援	○今から何をするのかがわかり、関心や期待をもてるよう、素材を見せる。	
「今からすること」の紙を見る。	見通しをもたせる。	○作り方の順番が分かるように前に「今からすること」を掲示し、各グループにも1枚ずつ配布する。	
パスとのりを取りに行く。	明確な指示	○指示を短い言葉で伝えることで、理解できるようにする。	●顔の形をとらえてかきやすいよう小さい紙を準備する。
小さい紙に自分の顔をかく。	教材の工夫		●顔のパーツに気付くことができるように、友達や教師の顔を見せる。
4人グループでそれぞれの思いを出し合い、1枚の画用紙に自分のかいた顔や飾りを貼る。	教材の工夫	○それぞれの思いやよさに気付けるように、工夫しているところやがんばっているところを言葉にしていく。 ○思いを言えない幼児には、教師が間に入りみんなが思いを出せるように機会をつくる。	●自分の顔ができた達成感を味わえるように、できたことを一緒に喜ぶ。 ●友だちと一緒に完成した喜びを味わえるように、グループに1枚画用紙を用意する。

まず、A児への援助が指導案の「展開」に具体的に示されていることが注目点である。次に、人的環境としてのグループのメンバーや目で見えてわかるように視覚的な支援がされているところがポイントである。この時、グループそれぞれの顔の飾り方が、はみ出したり、偏ったりして空間認知の違いがよく出ており興味深かった。(百瀬)

4.2. (1) c 実践の成果と課題

(1) 実践の成果

- ・A児の座る位置の工夫をしたことで、教師の指示を聞こうとする姿が見られた。また、A児が困っている時には、教師が側に行って声を掛けることができたので、最後まで同じ場で取り組むことができた。
- ・4人グループに一枚の画用紙を用意したことで、それぞれが自分の思いを出して1枚の作品を完成することができたことから、その時期の幼児の実態に応じた教材の工夫が必要であると改めて実感した。
- ・グループの編成を工夫したことにより、A児は安心して取り組むことができ、友達の考えを受け入れることができた。
- ・A児に関しては、ポスターづくりに興味をもって取り組み、自分の顔ができあがり教師に認められた喜びから自信につながった。また、同じグループの友達と1枚の紙に貼り合わせることで、みんなでできた喜びや達成感も味わうことができた。
- ・A児と 同じように困っている他の園児に対しても、いろいろな素材を準備したことで自分なりに工夫してつくることができ、作った顔や飾りを1枚の画用紙に貼ることで、友達と同じように自分でできた、頑張ったということがはっきり分かり、うれしいという気持ちにつながった。
- ・全員にとっても、最後に1枚の画用紙に貼りあわせることで、自分達で作ることができたという気持ちにつながった。

(2) 実践の課題

- ・製作の導入において、視覚支援は見通しをもつために有効であることが分かった。しかし幼児の発達段階に合わせた工夫が必要である。
- ・グループでの話し合いの中で、それぞれの幼児が自分の考えを言ったり、友達の考えを聞いたりできるようにするためには、4人のグループの人数が多かった。今後は一人一人が自分の思いや考えを伝えられるように、場の設定やグループの人数の工夫が必要である。

A児のために工夫した手だてが、他の困っている児童にもわかり易さや達成感につながったUD化にふさわしい事例となった。課題にも書かれてあるが、グループの人数もそのメンバー構成と合わせて大きな指導・支援の要点である。発達段階とその時の課題との整合性を検討し、今後も研究を重ねていきたいポイントである。(百瀬)

4.2. (2) S小学校1年生の実践事例から

4.2. (2) a 児童の実態

学級の中で気になる児童を事前に5名挙げ、その児童を中心に6月19日(火)5校時の音楽において学級全体の児童の様子と、児童の絵や観察記録などの作品を観察した。

さらに、授業後の研究会で検討し、ぼんやりしていてほとんど学習に参加できていなかったA児、参加しようとしているが指示の理解が難しそうだったB児、姿勢や手の動きが大変気になったC児の、特に3名について観察することとした。

4.2. (2) b 実践の概要

7月15日(水)3校時の国語において、A児B児C児3名の児童の様子を撮影した後、その記録から

教師の指示・発問に対してどれだけ反応できているかを数え記録した。

その上で、なぜ反応できなかったのか、どうすれば反応できるようになるのかなど、その手立てを考え実践することとした。

9月30日(水)3校時の国語において、前回の観察時の学習と同じ流れ(→発表→ノートを書く)であるが、事前にA児B児C児3名の児童への支援とその手立てを考えた指導案を作成した。その手立てが児童にとって有効であるならば、教師の指示への児童の反応が前回よりよくなっているのではないかと仮説を立て、前回と同じ方法で授業中の児童の様子を撮影・記録し、教師の指示に対して適切に反応できているかどうかを調べた。また、教師の支援に対して児童がどのように反応しているか児童の様子を観察した。

困っている子どもたち3名を焦点化し、指示・発問に対して適切な反応ができるかを観察した貴重な研究である。

まず、仮説を明確にしたことに注目したい。学校現場においても、研修は「研究」と「修養」であることを忘れてはならない。「研究」は科学であるからこのような姿勢を現場においても大切にしたい。その上で、「観察」→「記録」→「手立て」の工夫→「実践」→「記録」→「評価」(繰り返し)という研究方法を確実にやっていることにも注目しておきたい。

さて、学校現場の研修において、「子どもの実態」という言葉がよく使われる。「子どもの実態」に合わない指導・支援は子どもたちの成長につながらないと周知されているからだろう。ましてや、教科の視点や教師の願いや思いだけでの実践では、本当の子どもの成長にはつながらないことは言うまでもない。しかしながら、その「児童の実態」は子どもの学力や或いは生活状況等にとどまっていまいだろうか。

UD化の視点で考えたとき、「子どもの実態」を把握する中に、それぞれの子どもたちの「見え方」や「聞こえ方」「覚醒レベル」などの「認知面」で、どこにどのように困っているのかを把握する必要があるだろう。何に、或いはどこに困っているのか躓いているのかがわからないのに、「手立て」は生まれにくいからである。

このように「仮説」をもとに「手立て」を明確にし、一つの指標をもって「観察・記録」し「評価」という一連の取組によって、仮説の検証を試みた実践研究は、今後の科学的な「研修」の道標になるものと期待したい。(百瀬)

- (1) 単元名 かたかなをみつけよう
- (2) 単元目標 片仮名の語を正しく読み、片仮名で書く言葉を見つけて、書くことができる。
- (3) 評価基準

関心・意欲・態度	・身の回りにある片仮名を進んで探そうとしている。
書く	・語としてまとまりを意識して、片仮名の語を書いている。
言語活動	・教科書に提示された片仮名を正しく読んだり書いたりしている。

(4) 本時の展開

学習活動	指導上の留意点	UDの視点	個への手立て
1. めあてを確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・めあてを復唱し確認させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・机間指導の工夫 	<ul style="list-style-type: none"> ・傍で視線を合わせ、めあてを読むように促す。(A児)
かたかなのことばをみつけて たくかこう			
2. 音読をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書のページ数を板書し、開くページを見せ、視覚的に支援する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・視覚化 	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書を開けていない児童には個別に声をかける。(A児B児)
3. 教科書の詩から片仮名の言葉を見つけて発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ・音読姿勢の「合言葉」を言い、姿勢の確認をする。 ・教師に続いて音読させる。 ・片仮名の言葉が正しく読めない場合は支援する。 ・見つかった言葉をリズムにのせて音読する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・指示・発問の工夫 	<ul style="list-style-type: none"> ・姿勢を確認する。できていないときは、声をかけ音読姿勢をとるよう促す(C児)
4. 片仮名の言葉をノートに書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・正しい書き方を確認しながら視写させる。 ・ノートと同じマス目の小黒板を用いて、正しく写せるように支援する。 ・思い浮かばない児童には、教科書の絵を参考にしてよいことを伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・板書の工夫 ・机間指導の工夫 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動についてこれていない場合は、そばへ行き声をかけて活動を促す。(A児B児)
5. 知っている片仮名の言葉をノートに集めて書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・挿絵を拡大して提示する。 ・拗音、促音などは黒板にヒントを書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・視覚支援の工夫 	<ul style="list-style-type: none"> ・片仮名が分からない場合はカタカナ表を見せて個別に指導する。(A児)

展開において、やはりUDの視点が明確にされていることがポイントである。そのためには、困っている子どもたちがどんなところに困っているのかの把握が前提となる。さらに、UDの視点から指導上の留意点として、視覚情報からの支援として「教科書のページ数を板書し、開くページを見せる」や「ノートと同じマス目の小黒板を使う」ことが示され、さらに、「音読姿勢の合言葉」は叱る機会を減らし、より良い姿勢のモデリングとしてされている。また、「リズムにのせて音読する」のは、覚醒レベルの低い子どもたちを授業の中にできる限り参加させていく手立てとなっている。このように、様々な手立てが指導の展開の中に、「具体的に示されていること」が、よりわかり易い授業につながっていく要点となる。

(百瀬)

(5) 当初の支援が必要な児童への具体的な手立て

児童	対象児の実態	予想される困難さ	具体的な支援・手立て
A	ぼーっとしていることが多く、指示されたことを行動に移すことができない。行をとばしたり言葉が抜けたりして、板書を正しく視写できない。	<ul style="list-style-type: none"> ・全体での指示を聞き漏らし、教科書を開くことができない。 ・板書を正しく視写できない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・意識がこちらに向いていることを確認してから指示をする。 ・机間指導の際、正しく視写できるよう促す。
B	全体での指示が伝わりづらい。分からないときには周囲を見てから取りかかるため行動が遅く、時間内に書き終わらない。	<ul style="list-style-type: none"> ・指示の意味が理解できず、次にする活動が分からない。 ・自分の活動に自信がもてず、行動に移せない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全体指示の後に、理解できていない場合は具体的な言葉で活動を促す。
C	学習中に、手遊びや物を口に入れたり、姿勢が崩れたりしやすい。正しく視写できる。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習中に姿勢が崩れる。 ・物を口に入れながら話しを聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・正しい姿勢で学習できるよう声かけをする。

上の表に見られる当初の「具体的な支援・手立て」では、子どもたちの困っているところから出発できていないことが理解できる。「～指示する」「～促す」「～声をかける」という支援のできるのなら、教師の方も何も困ることはない。下の(6)ではそれらが、ア：指示の言葉を短くすることや、ウ：指示を出しながら板書する、さらに、オ：ノートと同じマス目の小黒板を用いることなど子どもたちの困っているところに寄り添った手立てがなされており、部員の先生方の努力がよく見えてくるところである。(百瀬)

(6) 全体への指示による児童の改善点

ア 指示を短く端的な言葉で出し、一度に複数の指示を出さない。そうすることで、児童が指示の内容を理解しやすくなり、スムーズに次の行動に移ることができる。

イ 注意散漫になりがちな児童への注意喚起のために、手拍子をうちながら音読する。音読に意識が向くとともに、全体の児童にとってもリズムよく音読することができる。多様な音読活動の工夫にもなり、学習に変化を持たせることができる。

ウ 指示を出しながら、教科書のページ数を板書する。情報が視覚化されるので、聞き逃した児童も自分で教科書を開けることができる。また全体の児童も確認することができる。

エ よい姿勢を意識させるため、音読姿勢の「合言葉」によって姿勢を意識させる。「合言葉」を使うことで、教師が注意をするような発言をしなくても、児童が自ら姿勢を意識することができる。

<本時の板書>

オ ノートと同じマス目の小黒板を用いることで、ノートに正しく写せるように支援する。



4.2. (2) c 実践時の児童の観察と結果

(1) 7月実施の授業

<教師の指示>

- 1 何も持ちません
- 2 全員で読みます
- 3 全員で読みます
- 4 教科書 78 ページを見ましょう
- 5 指で押さえながら聞いてください
- 6 先生が読んだ後続けて読んでください
- 7 教科書を置いて前を向きましょう
- 8 たまみさんが好きなものはなんでしょう。
- 9 どうして好きなんですか。
- 10 ぼくは、私は、〇〇が好きです、言えるでしょうか
- 11 教科書を置いて名前シールの上
- 12 ノートを開いて下敷きを入れます
- 13 姿勢、足机の下に入れてください
- 14 顔を上げましょう
- 15 日時からいきます、鉛筆用意
- 16 この後は好きなことを書いてください

<児童の反応>

A	B	C
1	1	①
2	2	②
③	③	③
④	4	④
5	5	⑤
⑥	6	⑥
7	7	⑦
8	8	⑧
9	9	⑨
10	10	⑩
11	11	⑪
12	12	⑫
13	⑬	13
14	14	⑭
⑮	⑮	⑮
⑯	⑯	⑯

(2) 9月実施の授業

- 1 黒板を見てください
- 2 では読みます、せーの
- 3 教科書 112 ページを開けます
- 4 姿勢いいですか 足はぺったん せなかは「ぴん」
おなかとせなかに「ぐうひとつ」
(音読姿勢の「合い言葉」)
- 5 では読みます
- 6 先生の後に読んでください
- 7 教科書を置いてください
- 8 (リズム打ちを始める)
- 9 (リズムにのって) コップにサラダ～
- 10 出てきたカタカナを発表してください
- 11 ちょっと読んでみます
- 12 前を向ってください
- 13 せーの
- 14 ノートを開いて下敷きを入れましょう
- 15 鉛筆準備
- 16 形をよく見て書きましょう

A	B	C
①	①	①
②	2	②
3	3	③
4	4	④
5	⑤	⑤
⑥	⑥	⑥
⑦	7	⑦
8	8	⑧
⑨	⑨	⑨
⑩	⑩	⑩
11	11	⑪
⑫	12	12
⑬	⑬	⑬
⑭	14	⑭
⑮	⑮	⑮
16	⑯	⑯

4.2. (2) d 実践の考察

教師の指示に対し、児童が適切な反応をした時は、表<児童の反応>番号を○で囲んでいる。隣の人を見てから反応したり、教師に支援してもらったりしたとき、全く指示を聞いていないとき等は、反応なしとして○で囲まないこととした。

適切な反応を示した回数を右の表にまとめた。

<適切な反応を示した回数>

A児B児ともに、7月に比べて9月実施の授業の方が適切な反応が増えている。7月は、途中からほとんど指示通り動くことができず、手遊びをして、隣の 人ばかり見ていた児童が、授業に参加し続ける姿勢を示すことができた。これは、

児童	A	B	C
7月の授業	5	4	15
9月の授業	10	8	15

7月に比べて適切な支援を行うことができた結果と言えるだろう。

特に、手拍子をしてリズムに合わせながら音読した時には、3人とも声を合わせて読むことができていた。体を動かすことにより、逸れがちだった意識を授業に戻すことができたからだと思われる。また、C児については、反応の回数は変わらないが、「せーの」「4のようなリズムカルな言葉」「では、…」など合い言葉を言ったり、手拍子でリズムをとったりしたことにより、物を口に入れたり口元に手を持って行ったりする回数が減り、良い姿勢をとる児童が増えた。

4.2. (2) e 実践の成果と課題

(1) 実践の成果

ユニバーサルな配慮によりA児B児C児の特性の違う子どもに響く効果的な指導ができた。

(2) 実践の課題

一定の取り組みにおいて、児童に入りやすい言葉や知るに至ったひとりひとりの実態 把握が大事である。

4.2. (2) f 全体へ継続して行った指導

(1) 書くこと「書字」の指導の実践

書くことが苦手な児童や、字が曲がってしまったり、まっすぐに書けなかったりする要因の中には、鉛筆の持ち方が悪く鉛筆の先が見えないために姿勢が悪くなったり、姿勢がくずれているために筆圧が弱くなったりすることがある。また、力加減が分からなかったり、友だちとの距離感がつかみにくかったりする児童は、ボディイメージ（自分の体への気づき）が弱く、姿勢を維持できないことがある。そのような場合、正しい姿勢や鉛筆の持ち方を時折指導することはもちろん大切だが、根本となる体を鍛えることも大切である。そこで、スムーズに体を動かせるための運動遊びを日々の体育や授業の始まりなどに取り入れることとした。

ワニ歩き・くま歩き・クモ歩きなど全身を使った運動やかえる逆立ち・つばめなどの体を支える運動などを継続して行った。



(2) 実践の考察(「書字」の分析)

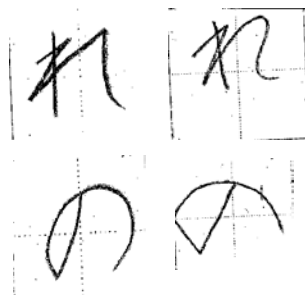
右は、B児が7月に書いたものである。文を正しく書き写すことができず、何度も書き直した後が見える。句読点も正しく打てず、力加減がうまくできないため角張った文字となっている。しかし12月に書いたものは、文を正しく写すことができており、字のバランスも随分よくなっている。

<B児のノート>



<D児のノート>

また、D児も文字の書き方に成長が見られた。「れ」は、7月の時には、折れが書きにくかったようだが、12月には折れが上手になり、字のバランスも大変よくなっている。



12月(左)と7月(右)のノート

「の」は線の終わりが回りきっていないかつ

たのが、最後まで書ききることができるようになり、のびのびとしたはらいができるようになっている。

このように、書くことに関して全体的に向上が見られたのは、9月より継続して書き方の指導や運動を行った成果だと言えるだろう。

写真を見ると、算数の時間の前に、何で机を使って「ツバメ」をやっているのかと不思議に思われるかもしれない。しかしながら、発達側面から考えると、工夫を凝らした運動を継続することで、感覚統合に課題を抱えている不器用な子どもたちも、その最も基本的な部分が鍛えられることになる。

例えば、B児の7月のノートを見ていただきたい。一生懸命にがんばっているが、マス目からはみ出したり、文字の大きさが整わなかったりしていることがわかる。それが12月ではマス目からはみ出す文字もなく真ん中に揃えて書くことができるようになっている。つまり、体を鍛えることで、学習に向かうためのピラミッドの底辺部分がしっかりと積み上げられることになり、その基礎・基本を土台として学習面でもできることが増えていくことの貴重な事例の一つである。(百瀬)

III まとめ(成果と課題)

まず、今回掲載できなかった実践の他にも、中学校家庭科におけるデジタル教材を使った視覚支援を中心とした実践や、5年生の「授業の視覚化」や「教室の環境構成」に着目した貴重な実践などそれぞれの学校園の現場で、多様な実践が行われたことを紹介しておきたい。

改めて、UD化部会、部員の先生方の真摯な努力に敬意を表したいと思う。

さて、この2年間の取組の成果は、まず大学の教員のその専門性をいかした幼・小・中に向けての講座や講演、巡回指導においては、それぞれの学校園の教員の学びになるばかりではなく、大学の教員自

身の学びとしても、フィードバックされたことである。我々大学の教員にとっても、その専門性を高める際に、その教育が行われている現場の幼児・児童・生徒の実態及びその現場で教育を行っている教師の現状を無視しては成り立たないものだからである。

今後も、様々な学校園の現場との交流を図りつつ、現場に即したさらなる専門性の向上を目指すことは、我々大学教員の一つの課題である。

次に、幼稚園から高校、大学までの教員が異校種の壁や教科の壁を乗り越えて、一つの研修グループとして2年間の学びを進め得たという事実から得られた成果である。

「ユニバーサルデザイン化」を柱とすれば、このような形での異校種にまたがる研修が可能であることを証明しており、これまで各校種で分断されがちであったそれぞれの学びが「ユニバーサルデザイン化」という視点で統合できるという事実を示している。

このような場が継続されることで、その成果は幼児・児童・生徒の発達や成長にとって将来的に大きなメリットにつながる可能性を見出したということと捉えている。

さらに、真に子どもに「寄り添う」という学校園現場での研修のあり方が今回の取組で、より明確になった点を上げたい。口先だけではなく、本当に学級経営や授業において子どもに寄り添うためには、子どもたちが何に困っているのかを観察・記録し、具体的な手立てを打ち、さらにそれを評価し、改善していくという実践を進めるという、実に当たり前の一連のサイクルを作り出すことなしには、成し得ない。

しかしながら、これまでの学校園現場の「研修」(研究と修養)は、修養ばかりがその中心となったり、教科や領域の視点のみを重視する研究になったり、子どもたちの実態(特に困っているところ)が見逃されて行われてきた場合も、しばしば見受けられる。

つまり、このUD化研究会では、子どもたちの観察・記録から始まり、その実態から手立てを工夫し実践し、また観察・記録し、改善していくという「エビデンスベースの実践研究」が行われたことも大きな成果である。

このような、取組が一つの基準になり、学校現場での研修が修養中心ではなく、目の前の子どもたちの事実即した本当の「研究」になっていくことを期待したい。

謝辞 本研究は、2014年度と2015年度の2年間にわたって実施した関西国際大学教育総合研究所研究プロジェクト「発達特性に応じた保育・授業のユニバーサルデザイン化の構築～すべてのステージで役立つ子ども理解と保育・授業力向上プラン～」(研究代表者：中尾繁樹)の研究成果である。プロジェクトは、研究代表者、本稿執筆者の他に、本学教育福祉学科の濱名陽子、奥山登美子、中西一彦、藤田継道、吉村啓子、坂口隆康、道中隆、長谷憲明、松岡宏明、川村光、上原昭三、田上由雄、岡修一、吉田武大、島川香織、松本恵美子、山本秀樹、笠原千絵、尊鉢隆史、尾崎慶太、木曾陽子、椋田善之が研究メンバーとして加わっている。

本稿の冒頭でも述べたが、この2年間、教育のユニバーサルデザイン化に向けて、尼崎市の学校現場のニーズに目を向け、本学との橋渡し役として、夏期講習や巡回指導の開講に尽力をいただいた尼崎市教育総合センター所長をはじめ、職員の方々に心よりお礼を申し上げたい。

参考文献

- 1) 関西国際大学 兵庫県尼崎市教育委員会『KUIS (Kansai University of International Studies) 発みんなの特別支援教育一』、2012 (平成 24) 年
- 2) 百瀬和夫『「笑育」のすすめⅠ～「ちょっと変な教師」が教育を救う～』[さんだる文庫]、2014 (平成 26) 年
- 3) 中尾繁樹編著『通常学級で使える「特別支援教育ハンドブック」』明治図書出版株式会社、2013 (平成 25) 年
- 4) 中尾繁樹『「特別」ではない特別支援教育① 子どもの特性を知るアセスメントと指導・支援』明治図書出版株式会社、2009 (平成 21) 年
- 5) 小貫悟・桂聖『授業のユニバーサルデザイン入門—どの子も楽しく「わかる・できる」授業の作り方—』株式会社東洋館出版社、2014 (平成 26) 年
- 6) 授業のユニバーサルデザイン研究会関西支部『授業のユニバーサルデザインを目指す「安心」「刺激」でつくる学級経営マニュアル』東洋館出版社、2014 (平成 26) 年

Abstract

Kansai University of International Studies (KUIS) have worked on the task with the Amagasaki City Board of Education since 2014. To meet the needs of teachers in Amagasaki City, KUIS held the summer intensive course and were engaged in circuit teaching. KUIS organized workshop with teachers from kindergarten to high school, could proceed the related research in this year.

Recently, there are obviously children who have the special educational needs at each school level. It is very serious for each school to make up classes where all children including the children who have the special educational needs can have safe and ease life, to realize enjoyable and simple teaching.

In this research, the author examines the result of these 2 years and future issues.